

ノヴァーリスの術語「ロマン化」のメディア論的含意 ——諸学問思想の帰結としての「書物化」の要請

野村東生

序

本稿は、ノヴァーリス(1772-1801)の術語「ロマン化(Romantisierung)」の具体的含意を検討し、この術語が「個人の経験を書物という形で物質化する」というノヴァーリスの要請を含意していることを主張する。

第1章では、ノヴァーリスの断章における「世界はロマン化されねばならない(II, S. 545, Nr. 105)」という有名な一節を起点に、ここでロマン化の対象とされる「世界」の内実を考察する。1.1では、ノヴァーリスの認識論を踏まえつつ、彼が「世界」の語に「私の世界」という主観的性格を含めることを指摘する。1.2では、この「私の世界」が当該個人による経験の内容から構成されていることを、ノヴァーリスが受容したフィヒテの自我哲学との関連のもとで示す。

第2章では、ノヴァーリスの学問論を扱う。2.1では、シラーに代表される学問思想の論者が18世紀後半のドイツの社会状況を踏まえて「学問と人間の細分化・断片化」を問題視していたことを紹介し、ノヴァーリスもまたこの細分化に自覚的であることを示す。2.2では、ノヴァーリスや盟友Fr. シュレーゲルがライプニッツ由来の結合術思想を踏まえ、上述の細分化を克服し再び学問を結合してゆく「有機化」を志向していることを示す。

第3章では、ノヴァーリスの書物論を扱う。3.1では、ノヴァーリスが「ロマン」の語を「書物としての生」と表現することを踏まえ、彼にとっての書物が、個人の生すなわち経験の内容を表現したものであることを示す。3.2では、個人の経験を書物として著すことに対してノヴァーリスが見込む意義を論じる。内的な経験を物質としての書物に変換することは、個人が学んだ学問の集約と、後代の他者へのその伝達を可能にするのである。

1. 個人の経験からなる「私の世界」——ロマン化の対象として

1.1

ノヴァーリスは、有名な 1798 年の第 105 番断章冒頭において「世界はロマン化されねばならない」と述べる。

ここでロマン化の操作対象として挙げられた「世界」は、ノヴァーリスの認識論における重要概念でもある。認識論の文脈で「世界」を論じる際、ノヴァーリスはしばしば「私の世界 (meine Welt)」という表現を用いる。

我々の身体は世界の一部分である——〔あるいは〕一員という方がより適切に言い表している。

世界に対して、私はその全体に恣意的に作用すべきではないし、それを望みもしない——そのかわり、私は身体を持っている——私の身体を変化させることを通じて、私は私に対して私の世界を変化させる。私の現存在を入れる器に対して効力を持たずとも、同様に〔同様の効力を持つ行為として〕、私は間接的に私の世界を形成する。

(II, SS. 650-651, Nr. 485)

身体を通じて受容する認識の総体を「私の世界」とするならば、それと対置される「世界全体」への言及は、「私の世界」を一部分とし、「私」には認識しえぬものによって「私」を取り巻く「器」すなわち外部の事物の存在を示唆する、超越論的な言及であろう。

この「世界全体」は、認識しえぬものである以上、「私」による操作の対象とはならない。したがって、ノヴァーリスはロマン化の操作対象として、或る主体に帰属する有限の領域としての「私の世界」を想定していると考えられる。

1.2

次にノヴァーリスの認識論に即し、世界の一部分としての「私の世界」の内容を検討する。彼にとって認識とは、自我と外的事物との結合である。

なぜ本来の物自体が認識不能であるかについて、今や我々は一つの新たな光明を手に入れている——それ〔物自体〕は絶対的に孤立している——単純な素材なのである。それは、共同的状态においてのみ、何か規定しうるもの・規定されたものになる——我々の学問は全て、関係的学問なのだ。全ての学問は、単純な学問の上に成り立つ——単純で、総合的な命題——〔すなわち〕自我〔の上に〕。

(III, S. 56)

フィヒテの自我哲学を踏まえた⁽¹⁾ この一節によれば、物自体すなわち外的対象の認識は、それが認識主体の自我と結合することによってはじめて成立する。

他の断章では、この認識過程が「私」という語を強調しつつ示される。

〔……〕私が何かを経験できるのは、それを私のうちに受け入れる限りにおいてである。〔……〕〔その過程は〕他の物質を専有すること、つまり自分のものへと変えることでもある。

(II, SS. 551-552, Nr. 118)

ここでは、認識に際する自我と外的事物との結合の過程が、事物の「専有」すなわち「私の事物」への変換の過程でもあることが示唆されている。

したがって、ノヴァーリスが認識論の文脈で述べる「私の世界」とは、自我と事物との結合により生じる個人の認識の総体であり、それは世界全体に対する一部分にとどまるものである。

以上 1.1、1.2 より、ノヴァーリスは、「私の世界」すなわち個人の認識の総体を「ロマン化」することを要請していると考えられる。

2. ノヴァーリスの学問論 ——18世紀諸学問思想の帰結として

2.1

Safranskiによれば、18世紀後半のドイツ社会は「専門化」と「細分化」によって特徴付けられる。まず職業に関して、技術や工業の飛躍的な発展に伴う分業と専門化の進行により社会全体の豊かさが向上する一方で、個々人は、細分化された自らの生業しか理解できない「破片」的存在となる。この時代、シラーを筆頭とするドイツの思想家たちは、この人間の「破片」化を問題視している。そしてこの専門化と細分化は、学問の領域にも及ぶ。近代科学の進展は、学問を細分化し、個々人が各々の専門領域に専念することで達成された側面を持つのである⁽²⁾。認識対象としての学問が細分化し、かつそれぞれの学問が専門性を高めてゆく状況において、各個人が学びうる学問領域は、本人の専門や適性、置かれた状況などの諸条件によって個別性を増す。

ゆえに、認識可能な事物の総体としての「私の世界」に含まれる学問や知識の種類・程度は、各個人において異なる。ノヴァーリスもこの断片化・細分化を意識している。「百科全書のための一般草稿」(以下「一般草稿」)では、「記憶」という語を介在させつつ、知識の度合いが各個人によって異なることへの顧慮を思わせる記述を行う。

記憶力は個人的な感覚——個性化の要素である。

(III, S. 434, Nr. 859)

また別の箇所では「記憶力」と「学識」が接続される。

文学⁽³⁾

学識は記憶力に相応する。才能あるいは手腕は、精神〔の程度〕に相応する。両者を結びつけることは、両者を二項式とみなし、これを累乗することを意味する。

{……}

(III, S. 277, Nr. 213)

これら二つの断章から、記憶力という個人的能力によって個人の知識が個性化されることが明らかになる。さらに 1798 年の断章では、記憶のあり方をめぐって「記憶はすべて現在である〔後略〕(II, S. 559, Nr. 158)」という言及がなされる。一般に過去に属するものとされる記憶を「現在」へと回収するこの断章は、過去に得た知識や学問の経験の(記憶している限りでの)総体はその個人の現在の「世界」を構成する、という主張であると解しうる。

このような断片的存在としての個人にとって、学問という事物の総体はもはや把握不能である。学問の全貌の把握不能性についてのノヴァーリスの自覚は、「対話と独白」第 1 対話でも表明されている。

A: しかし、このような事態が進行すれば、最終的にはどんな学問ももはやその全体を研究できなくなるだろう——文献の量は途方もなく膨大になってゆく〔のだから〕。

(II, S. 663)

ここではあくまで将来の状況への予見として言及されるに過ぎないが、ノヴァーリスが学問の専門化とそれに伴う全体の把握不能性を意識していることは明らかである。

したがって、ノヴァーリスは個人の経験可能な学問の有限性と個別性を意識している。この時代、「私の世界」の内実をなす事物としての学問は、すでに細分化・専門化され各個人の能力に応じて限定的に学び取られるものなのである。

2.2

18 世紀後半を通じて進行した学問と個人の細分化を受け、ノヴァーリスが活動した 18 世紀末には、この細分化を克服しようとする動向が芽生える。この傾向は、個人においてはジャンルを問わずあらゆる学問を吸収しようとする姿勢に現れ⁽⁴⁾、学問論においては、細分化を克服して個々の学問を有機的に関連付けてゆく「有機化」の試みとして展開される⁽⁵⁾。

ノヴァーリスやその盟友 Fr. シュレーゲルは、ライプニッツにより整備された結合術思想の実践によって、事物や学問の再結合を試みる⁽⁶⁾。ノヴァーリスは断章集「花粉」で次のように述べる。

すべての知識の最も緊密な共同体、あるいは学問の共和国こそが、学者たちの高き目標である。

(II, S. 451, Nr. 85)

「すべての知識の最も緊密な共同体」とはすなわち、あらゆる知識・学問が有機的に結合された理想的状態を指すものであろう。そして、この理想的状態こそが学者たちの目指すべき目標とされる。これをあくまで目標として立てていることから分かるように、ノヴァーリスは学問の有機的結合を将来において達成されるべき課題として捉えている。

以上 2.1、2.2 より、ノヴァーリスは、個人がその能力に応じて断片的に経験する事物としての諸学問は将来有機的に結合されるべきものであると考えている。

3. ノヴァーリスの書物論 —— 経験の伝達を可能にするメディウムとして

3.1

そもそも「ロマン (der Roman)」とは、俗語 (ロマンス語) によって書かれた物語を指す言葉であり⁽⁷⁾、特に騎士道物語などの長篇小説を指す。ノヴァーリスはこの「ロマン (小説)」という語を、その内容のみならず、「書物」というメディウムの形態を踏まえて特徴づける。

一冊の小説とは、書物としての一つの生である〔後略〕。

(II, S. 599, Nr. 341)

1798 年のこの断章では「ロマン」が「生」を扱い、かつ「書物」の形態をとるもの

であることが端的に示されている。

ロマンが扱う「生」について、別の断章ではさらなる言及がなされる。

小説は生を扱い、——生を表現する。〔後略〕

(II, S. 570, Nr. 212)

この断章では、小説と生との関わり方が、「扱い」「表現する」という二段階的な仕方で表明されている。経験すること (=扱うこと) と表現することは、どちらも個人の精神を成立の前提とする能動的な行為である。

別の断章では、この経験と表現の同根的性格が「書物」を例に示される。

書物の世界は、実際、現実世界のカリカチュアに過ぎない。両者は同一の源から発する——しかし前者〔書物の世界〕は、より自由でより柔軟な媒体の中に現れる——〔……〕表現は誇張的である。〔……〕それゆえに、前者〔書物の世界〕の方がより詩的で——才気に満ち——関心を引き——絵画的である——〔後略〕

(II, S. 578, Nr. 237)

経験の総体として立ち上がる自らの「現実世界」を題材に、それを誇張的に表現することで著される書物は、自らの精神から能動的に発するものである。

さらに別の断章では、「小説」と「生」との二段階的な関係が別の形で示される。

〔前略〕生とは、我々に与えられた小説ではなく、我々によって著される小説であるべきである。

(II, S. 563, Nr. 187)

ここでは、所与のものとしての経験すなわち生をそのまま甘受するのではなく、それを能動的な表現すなわち著述活動によって小説へと変換してゆくことが要請されている (8) (9)。

したがって、ノヴァーリスにとって「小説」とは、自らの生すなわち経験の総体を題材とし、それを「書物」という物質的形態へと変換したものであると考えられる。この変換によって始めて、或る個人の経験は他者すなわち読者に伝達可能なものとなる。

3.2

個人の経験の総体は、書物の中の文字という形態に変換されることによって情報量を圧縮される。これは、学問や知識の取り扱いを容易にし、有機化が進展するにつれ密度を増す学問を取り扱い可能にするために必要な操作である。「花粉」第2番断章では、事物すなわち経験を文字として表現することが持つ「抽象」の効果が表明される。

音と線による表示は、驚くべき抽象化である。4つの文字が私に神を指し示し、数本の線が百万の事物を表現する。これによって、万有の取り扱いがなんと容易になるだろう！〔後略〕

(II, S. 413, Nr. 2)

ここで示されているのは、単一の事物を取り扱い可能にするための手段としての文字の有用性である。これはあくまで、文字に起こすことによる経験の伝達可能化を示唆している。

そして「対話と独白」第1対話では、書物という媒体内部における情報の「圧縮」の在り方が示される。

B:〔前略〕表題だけで骨相学的に〔本の内容を〕十分に読み取ることができることもしばしばある。序文もまた、書物の精密な計測器だ。〔後略〕

(II, S. 663)

書物の氾濫によって学問の全貌を学び取ることが不可能となった、というAの嘆息を受けて述べられたこのBの言葉は、作者が自らの著述を読者的に顧慮することで

書き表される「表題」ないし「序文」が、彼の経験の有機化すなわち緊密化を本文以上に推し進めた「圧縮」的産物であることを明らかにしている。このように、書物を著すことで経験を文字へと変換し、その内容をさらに序文や表題へと圧縮することで、読者が処理せねばならない情報量は軽減されてゆく。

ノヴァーリスは、或る個人によって著された書物を読む読者もまた独自の経験世界を形成する一人の個人であることを意識している。

〔前略〕／あらゆる読者は文献学者ではないだろうか？／

通常の意味で、普遍妥当的な読みなるものは存在しない。読むことは自由な活動である。私が何をどのように読むべきなのかを私に指示できる者は誰もいない。

〔後略〕

(II, S. 609, Nr. 398)

「普遍妥当的な読み」が存在しないというのは、読者にとって任意の書物は「与えられた小説」すなわち文献学的な「経験」であり、精神の傾向に応じて不可避免的に独自性を帯びるというノヴァーリスの経験図式から帰結されるものであろう。読者が読む対象やその経験のあり方は、他者によって指示すなわち操作可能なものではない。或る個人によって著された書物は、他の個人や自分自身における「読む」行為によって、各々の経験世界に独自の仕方では組み込まれるひとつの事物となるのである。

読書行為が書物を対象としたひとつの経験であるならば、読者という個人もまた、読書経験やその他の経験の総体としての自らの「世界」を「ロマン化」し、書物へと書き起こす次代の著者となることができる。Safranski は 18 世紀末の識字率向上を念頭に、彼らを「潜在的な読者層」と形容する⁽¹⁰⁾ が、ここまでの議論を踏まえれば、これらの読者はまた「潜在的な著者」であるとも言える。或る個人の経験が書物化されることで他者に経験可能となり、その他者の経験がまた書物化されることでさらなる他者に経験可能となる、というこの過程は、際限なく連鎖してゆく。

読書と著述の連鎖的關係において想定される「次代の読者 (II, S. 470, Nr. 125)」すなわち潜在的な著者は、単に手続き的に後続する存在ではなく、時間的にも先代の著者

に後続する。ノヴァーリスは、世代の連鎖の終点である「第無限世代」すなわち「真の世代」(III, S. 254, Nr. 79)の世界を、連鎖の起点である原初の世界になぞらえつつも、はっきりと峻別する。「一般草稿」ではこのことが「カオス」の表現のもとに示される。

〔前略〕

未来の世界は、すべてがかつての世界のようでありながら、すべてがまったく異なっている。未来の世界は、理性的なカオスである——〔……〕——カオスの二乗、あるいは無限乗。

〔後略〕

(III, S. 281, Nr. 234)

この表現から、「かつての世界」が「理性的ではないカオス」であったことが予測できる。この予測は、「花粉」第95番断章によって裏付けられる。

抽象化の以前、全ては一であるが、しかしカオスのような一である。抽象化の後、再び全ては統合されるが、この統合は、独立的・自律的存在者の自由な結合である——〔……〕——カオスはひとつの多様な世界へと転じた。

(II, SS. 455-457, Nr. 95)

ノヴァーリスは、始源の世界を混沌的な「一」として捉えたうえで、抽象化を経て再び統合される世界を、「独立的・自律的存在者の自由な結合」と表現する。上に挙げた断章に照らせば、このような「一」のあり方こそが「理性的なカオス」の意味するところであろう。未来におけるこのような「理性的なカオス」「自由な結合」は、同じく「花粉」に収められた第85番断章における「すべての知識の最も緊密な共同体」「学問の共和国」という表現との関連のもとに捉えられる。ゆえに、ここで言及される中間段階としての「抽象化」は、ノヴァーリスの生きた18世紀後半における学問の細分化の進行を意味していると考えられる。これらの断章における「未来における統合」

への志向は、始源の混沌的な「一」から近代に至るまでに学問が被った細分化・多様化を踏まえ、それらの独立性を保ちつつも再び「独立的存在者の結合」という「緊密な一」へと収斂させてゆく転換の端緒にある世代としての、自らの現況と目標を表明したものである。

以上の議論を踏まえれば、学問の有機化に向けた進展の途中段階にある各々の世代において各個人が為すべきことが定められる。各個人は、到達目標としての「すべての知識の最も緊密な共同体」を意識し、その中で自らの著述行為が何らかの貢献を果たしていることを前提したうえで、自らの偶然的状況において可能な限りの学問を学び取る。そして、その経験を書物において「結合」することで、自らを含む次代の読者・著者へと継承してゆくのである。

以上 3.1、3.2 より、ノヴァーリスの書物観が明らかになる。個人の経験を書物化するなわちロマン化することで、後代の読者はより多くの学問を経験することができる。そしてこの読者は、自ら著者となり、先行する世代よりも相対的多数の学問を書物において結合する。この著述と読書の連鎖によって、将来的に学問の有機的結合が達成されるのである。

結

第1章で示した通り、ロマン化の対象である「世界」とは、認識主体たる個人が自らの自我と結合させることによって経験する事物の総体であった。「学問」を一種の事物とみなすなら、第2章で示したノヴァーリスの学問論が志向するのは、18世紀後半の社会において細分化・断片化を被り各個人の経験に組み込まれた諸学問を、再び有機的に結合してゆくことである。そして第3章で示した通り、個人の経験を書物化するなわちロマンへと変換することは、著述と読書の連鎖による将来的な学問の有機的結合を可能にする操作である。

したがって、ノヴァーリスが「世界のロマン化」を要請するとき、それは個人の経験を物質化し、他者に経験可能なものとする「書物化」の操作を含意していると結論できる⁽¹¹⁾。

凡例

- ・一次文献として次の全集を用いる。Novalis: *Schriften*. Hrsg. von Paul Kluckhohn und Richard Samuel; unter Mitarbeit von Heinz Ritter und Gerhard Schulz, Stuttgart, Kohlhammer, 1977-.
- ・一次文献からの引用については、「巻次, ページ数, 断章番号が振られている場合はその番号」を表記する {例: II, S. 545, Nr. 105}。
- ・一次文献における斜体は、当該箇所の下線を付すことで示す。
- ・引用文中で省略を行う場合、亀括弧〔……〕を用いてその旨を示す。また本稿筆者による補足を文中に挿入する場合も〔補足内容〕という形をとる。

註

- (1) ノヴァーリスは1795年から97年にかけてフィヒテ哲学を集中的に研究した。その研究ノートは「フィヒテ研究」(II, SS. 104-296) および「フィヒテ抄録」(II, SS. 345-359) として全集に収められている。
- (2) Safranski, Rüdiger: *Romantik: eine deutscheh Affäre*, München, Carl Hanser, 2007. (『ロマン主義: あるドイツ的な事件』(津山拓也訳) 法政大学出版局、2010年)
- (3) 「一般草稿」前半では、断章の題が大文字で付される。訳出の際には、太字で代替する。
- (4) Safranski (2007), p. 60. (邦訳書 53 頁。)
- (5) ノヴァーリス『ノヴァーリス作品集 III』(今泉文子訳) ちくま文庫、2007年、410-411頁。(訳者による解題)
- (6) Neubauer, John: *Symbolismus und symbolische Logik: die Idee der ars combinatoria in der Entwicklung der modernen Dichtung*, München, W. Fink, 1978. (『アルス・コンビナトリア: 象徴主義と記号論理学』(原研二訳) ありな書房、1999年)
- (7) 小田部胤久「ロマン主義の美学を突き動かしていたもの——三つの源泉をめぐって——」『ドイツ・ロマン主義研究』(伊坂青司・原田哲史編、御茶の水書房、2007年、212-233頁)、215頁。
- (8) 所与のものとしての「生」がそもそも「与えられた小説」と形容されていることについては、当時の外界経験がもっぱら書物に依存するものであったことから説明可能であろう。ノヴァーリスもまた、この書物依存的な経験の形態に言及する。「〔前略〕大方の学者も含む大抵の人間は、書物から得た見解——現実世界の断片的見解——しか持たない——。〔後略〕」(II, S. 578, Nr. 237)
- (9) 高橋優『ロマン主義的感性論の展開——ノヴァーリスとその時代、そしてその先へ』(春風社、2023年)では、この断章を「小説に描かれるべき「生」は、運命に従属するものではなく、偶然の遊戯に身を委ね、自らの意志で発展するものでなくてはならない」(147頁)という、生の能動性をめぐるノヴァーリスの見解として解釈している。本稿における解釈との齟齬は、「小説」の

語をその内容において捉えるか形態において捉えるかの差異に起因している。

(10) Safranski (2007) , p. 48. (邦訳書 41 頁。)

(11) 「「ロマン化」とは数学における微積分法を範例としつつ有限なものを無限なものへと関係づけるものである」(小田部(2007)、228頁)といった数学的解釈、「可視的世界を「空間分割と空間充足の体系」として描くことに始まり、世界史の時間化を経て「歴史の神話」へと至る〔ための媒体としてのロマン〕」(高橋(2023)、140頁)という歴史的解釈、あるいは「〔ノヴァーリスにとって〕は「ロマン化」に際して、世界は文学的小説形式すなわちこのジャンルに固有の特性に準拠して再構成されるべきである。〔……〕ノヴァーリスは明らかに、生活世界におけるきわめて現実的で客観的な作用を詩〔文学〕に対して期待している。」(Horstkotte, Silke: „Die Poetik der Androgynie in Novalis' ›Heinrich von Ofterdingen.‹,” *Novalis: Poesie und Poetik*, hrsg. von Herbert Uerlings, Tübingen, Max Niemeyer Verlag, 2004, p. 140) という詩的解釈のいずれの場合においても、「詩〔小説〕の変容的な力が厳密にはいかなるものであるのかは、必然的に不明のままである」(ebd.)。本稿はこの空白箇所としての「ロマン化」の具体的操作をめぐる一つの解釈であり、これを介して上述の諸解釈を統合的に整理することが今後の研究課題となる。